

有田地方最古の瓦

瓦礫（がれき）とは、瓦と小石を指し、価値のないものたもととして使用されます。使われなくなった瓦は、瓦礫として扱われますが、昔の瓦には歴史を物語る重要な情報がつまっています。

日本における瓦の歴史は、今からおおよそ1430年前の飛鳥時代に遡ります。朝鮮半島の百濟から、僧侶や大工などとともに4人の「瓦博士」が来日し、日本最古の寺院である飛鳥寺を造営したことが日本における本格的な瓦作りの始まりです。

それから約100年後、瓦は藤原京といった宮殿や各地の役所にも使用されるようになりました。住宅にまで瓦が普及するのは江戸時代に入ってからと言われている。瓦はおおよそ千年にわたってお寺や役所のようなごく限られた建物にのみ使われる貴重なものであったと言えます。数多くの瓦を使用した立派な建物は、古代の人々を圧倒したことが想像され、瓦は政治や宗教的な権威を象徴するものでもありました。

町内で最も古い時代の瓦は、田口地区から発見されて

います。有田市との境界に近い有田川の北岸の畑から、かつて多くの瓦が発見されたと言われており、その場所は田殿廃寺跡と呼ばれています。瓦の年代はおおよそ1300年以上前のもので、有田地方の中でも最古の瓦です。この地域に仏教が伝わった時期を示す貴重なものであることから、町の文化財に指定されています。

写真の瓦は軒先に用いられた軒丸瓦で、直径が約20cmあり、後の時代に比べて非常に大きいものです。瓦の模様は蓮の花を真上から見たデザインになっています。真ん中の部分には、蓮子（種子）が表現されています。古代の軒丸瓦の模様は、ほとんどが蓮をあしらったものです。蓮は仏教を象徴する花であり、瓦が仏教とともに発展してきたことを物語っています。

田殿廃寺跡の軒丸瓦は、奈良県明日香村の川原寺の瓦とよく似た模様です。川原寺は、斉明天皇の川原宮の地に天智天皇の勅願で建立されたと考えられる大寺院で、日本各地の古代寺院跡からもよく似た模様の瓦が発見されていることから、大きな影響を与えたと考えられています。

田殿廃寺跡
出土の瓦は、
地域交流センター（ALEC）の常設展
でご覧いただけます。



田殿廃寺跡の軒丸瓦（直径 20.2 cm）

広告 町収入の一部とするため有料広告を掲載しています。

